

# その4

## 「三人の母の段」

### 竹本駒之助 女流義太夫一代記



【チラシ使用写真】竹本駒之助十八才 湯島・鶴澤三生宅にて

淡路の生みの母、芸の母・竹本春駒、義母の鶴澤三生という三人の母が私にはいます。生んでくれた親、育ての親、お姑さん、みんな御縁ですね。それぞれと暮らした時間は違いますが、私が義太夫を続けられるよう、情愛を注いでくれたことに変わりはありません。

生みの母とは、十四歳で春駒の内弟子になったときに家を出たまま、行き来はあったものの、ずっと一緒に住むことはありませんでした。この道で立つように養女に出した娘だから、褒められたらそれは嬉しいかもしれないけれど、母親だからといってしゃしゃり出ていくのは控えなきゃいけないと、そう言っていたのをおぼえています。お嫁にいくときのお支度も全部してくれましたけれど、母

を含めて淡路の親戚は式に出席しませんでした。すべて春駒に託して、春駒の娘としてお嫁入りのだから、ということですね。義理を大切にする人でしたから、母親として式に出るのは、義理に欠けるということだったでしょう。母を看取ったのは姉です。亡くなる前に会いに行ったりはしましたが、一日として私が看病することはなかったですし、そういうことを母は望んでもいなかったと思います。

母は私がお稽古に邁進できるいろいろなことをしてくれました。春駒のところ弟子入りした後も、私の衣食住はすべて淡路の実家からきていました。お米を含めて食べるもの、着るものと、お粥にもお米をほんの少ししか入れないほどの儉約家でしたが、私の実家からくるもので生活していたことで、より節約していたのではないかと思います。

私は四人姉妹の二番目で、何不自由なく賑やかに育ちましたので、春駒との窮乏な生活でホームシックにかかって、初めはずっと帰りたい、帰りたいと泣いていました。父が厳格な人で、姉が厳しく

怒られているとき、私は要領よくさーっと逃げていましたから、そのバチがあたってこんな窮乏な生活をする羽目になったに違いなとまで思っていたんです。義太夫に目覚めて、もう淡路に帰りたいとは思わなくなってからは、姉や妹が遊びに来たりして、親戚付き合いのようなことをしたり、姉が春駒の家から学校に通ったこともありました。

春駒は、私の先輩さんたちも一目置くようなけむたい人でした。私にとつては、飽くまで「芸の母」で肉親という感情は薄かったのですが、お嫁入りするくらいから、春駒の態度が変わってきたんです。私が離れていつてしまうと困ると思ったのか、春駒のほうが進歩するようになったんですね。三人の母のうち、春駒と暮らした時間が一番長く、春駒が六十歳のときから、九七歳で亡くなるまで四十年近く続きました。天涯孤独の人で、息を引き取るまで私が看取り、亡くなった後も本人の思う通りにすることができて、恩返しができたと思っております。

主人の母である三生には、実の母のような気持ちで接してましたし、三

生も私を娘のように思ってくれました。私も芸のなかで修行した娘ですから、三生のことは細かいところまですべてわかるんです。明日の着物はどんなだとか、これは洗っておかきやいけないとか、なんにも言われなくても、身の回りのお世話ができたんですね。当時すでに、お姑さんとお嫁さんが一緒に住むことが少なくなっていた時代で、着替えからなにか全部お世話するお嫁さんは珍しかったんです。御親戚の方がご法事にみえたとき、「こないいお嫁さんは探してもみつからない」と言われたそうです。三生も私を頼って、主人に言わないことでも私にはなんでも言ってきました。主人が留守だというと逆に安心して「こうして、ああして」と言うくらい、心を許してくれたのが私は嬉しかったです。そういうお姑さんに出会えて本当に幸せでした。

ですから三生に対しては「義理の母」というふうに思ったことがないんです。母もいつも「嫁」と言わずに「娘」と言っていましたから、うちにいらつしやるお医者さんからも「このごりようさん(お嬢さん)ですか」と言われたりと、まわりは実の娘と思っていたようです。うちの息子と娘は、三生のことを「おばあちゃん」、春駒を「大阪ばあば」、淡路の母を「淡路のお

ばあちゃん」と呼んでいました。

三生は、春駒が逝く三年前に、八三歳で亡くなりました。家族みんなで看取ることができて、私としては本望でした。三生から義太夫の師匠ではありませんが、私が義太夫を続けられるよう嫁に選んでくれたのは三生です。毎日お世話しながら、目に見えないことをいろいろ教わっていたと思います。

第四弾で語らせていただく『仮名手本忠臣蔵』九段目切「山科隠家の段」は、つばめ師匠(四代竹本越路大夫)から習いました。結婚して子供が生まれてから、三十代の頃だったと思います。その前には、小浪の役がついて、その部分だけお稽古していただいたことがあります。九段目切は一時間以上あり、一人で語るのとても大変な演目です。六人の登場人物、ひとりひとりの心情を精一杯語らせていただきたいと思っています。

由良助の息子・力弥と、本蔵の娘・小浪の結婚をめぐって、二組の夫婦と親子の葛藤が描かれています。

本蔵の妻・戸無瀬は後妻さんですから、小浪は実の娘ではないんですね。「義理愛」がそこにはあります。そこも難しいところです。

義太夫を語るうえで、この人の心情はどうだろうと人一倍感じることができるようになったのも、私自身が二人の子の母となり、母たちを見送って、いろいろな経験のなかでたくさん会得してきたからだと思います。皆さまにも、親子の縁を感じながら聞いていただけたらと思います。

【写真】二〇十五年二月公演のチラシ



KAAT

KANAGAWA ARTS THEATRE